



給水塔が残る西岡水源池。今は市民の憩いの場になっている

独立歩兵大隊に水道を引き、その管理のために造った道

水源池から北へ延びる道

明治29年(1896)、月寒に独立歩兵大隊(32年、歩兵第二十五連隊に改編)が新設され、平時2,000人、戦時6,000人分の水の確保が必要になった。

そこで鹿の踏み分け道を利用して水道管を引き、維持管理用として明治42年(1909)にその上に道路をつくった。これが水源池通の前身で、大正5年(1916)には室蘭街道(今の国道36号)まで延長されてきていた。

また、明治6年(1873)5月にはすでに江別道路(今の国道12号)から北側には、今の函館本線を越えてけもの道が延びていた。

その途中の部分はかなり後まで畑地のままで、栄通8丁目付近が昭和36年(1961)、札幌白石郵便局付近が42年(1967)に幅15m以上の道路になっている。

今日のように拡幅され舗装化されたのは、札幌オリンピックの前年の46年(1971)で、この時に白石区の部分も「水源池通」と命名された。なお陸橋が完成したのは昭和51年(1976)で、厚別通との合流点まで延長されたのは54年である。

水源池通の拡幅により、6丁目から8丁目までほぼつながっていた本郷商店街が大きく分断されるという代償も

払った。

水量の少ない場所で村民分に匹敵する兵の飲料水確保

工事報告書には「兵営における飲料水は井水を使用してきたが、年々水量の不足を感じ、かつ井水の水位も低下してきて、ますます給水が心配な事態になってきた」と書かれている。

月寒は台地で、普通でさえも水量が豊富でないところに軍隊が設置されるのだから、水の確保は重大問題だった。

連隊ができる前の明治32年の月寒の人口は2,899人だったので、新たに住民が生活するためには同等以上の水を確保することが必要となった。

必要水量からダムの位置を決定

西岡水源池は明治42年(1909)、月寒歩兵第二十五連隊が軍用として完成させたもので、豊平峡ダムが完成した昭和47年(1972)まで水道の水源として使われていた。

当時の東京における1人1日の水の需要量1.1立方mに余裕をもたせて必要な水量を計算し、えん堤を現在の西岡水源池の位置に決めた。工事は明治41年(1908)9月から始まり、1年2カ月、176,903円の費用で完成した。

水源池通を歩く

鹿の踏み跡から始まった曲がりくねった道は、馬車の交差もままならず、



その状態が大正末期まで続いたという。現在では想像もつかないりっぱな道が西岡水源池の北側から月寒川に沿って北東に延び、かつての広大な旧第二十五連隊のあった場所に達している。水源池通が国道36号を越えたところは連隊の敷地の一部で、月寒体育館と北海道開発局建設機械工作所が広い敷地に建っている。

豊平区と白石区の境界となる東北通・栄通も、戦後白石地区に多く出現した街道型の商店街である。国鉄千歳線跡地のサイクリングロードは昭和49年(1974)に完成した。

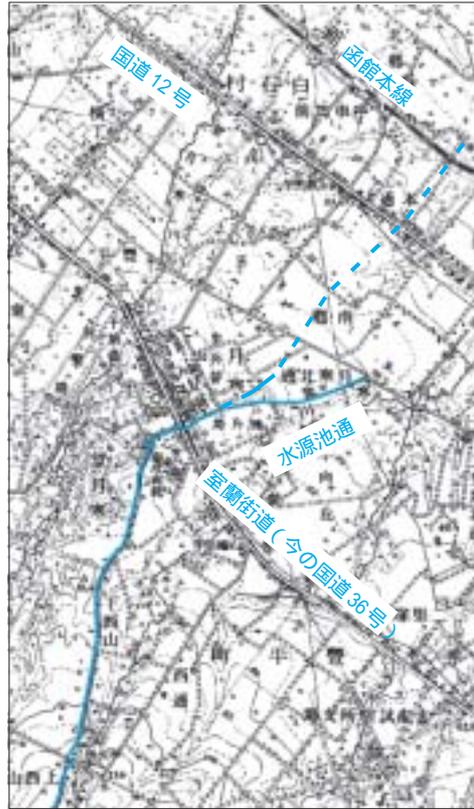
さて水源池通を進むと、左手に昭和38年(1963)設置の白石消防署の望楼がそびえ、その100m西に昭和48年(1973)開設のNTT札幌白石センタの巨大なパラポラアンテナが見え、やがて国道12号にぶつかる。

これから平和通までの間は、明治30年ころまで鈴木レンガ工場の土取場が左手にあり、その跡地は昭和40年ころまで養鯉池になっていた。

昭和54年(1979)開局の札幌白石郵便局を左に、平和通を越え柏丘中学校を右に見て函館本線の陸橋を渡ると、北郷一の繁華街、北13条北郷通に出る。以前はこの通りまでが白石駅付近を中心とした高台で、農業適地でもあった。

その北の厚別通に合流する地点で水源池通は終わっている。一帯は湿地で水田地帯にもなったが、昭和50年(1975)に札幌新道が新設され、付近の宅地化が急速に進み、昔の面影の低湿地はすっかりなくなった。

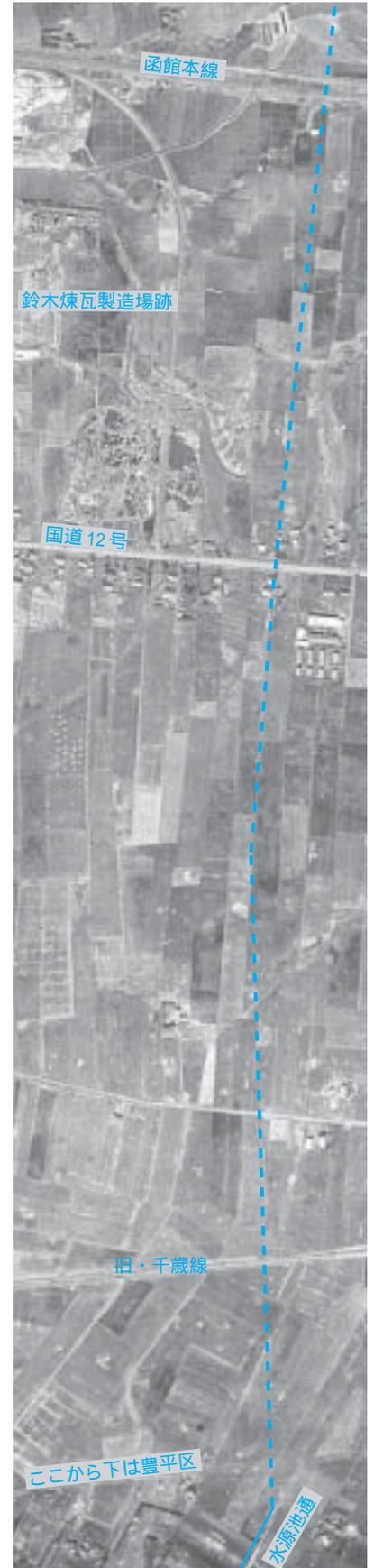
(塩見一釜)



大正5年の5万分の1地形図(部分拡大)
下の地形図では点線のように道筋が変わっている



昭和40年の5万分の1地形図(部分拡大)
時代が進むにつれて水源池通が延びているのがわかる



昭和23年頃米軍撮影の航空写真に現在の水源池通の位置を示したが、道は豊平までしかない